

## 今月の雑誌から

### 今月の雑誌から：新型コロナウイルスとの共存

投稿日：2020年08月21日



新型コロナウイルスの感染拡大に歯止めがかからない不安な状況が続いている。ワクチンや治療薬の開発にはっきりした展望が立たない中、このウイルスとは今後中長期的に「共存」せざるを得まいとする見方が広まっている。

主要月刊誌9月号は、「新型コロナウイルスとの共存」のためには、いかなる心構えが必要かという観点からの論文が多数見られ、人々の新型コロナウイルスに対する知識や理解力（リテラシー）の向上の必要性が叫ばれている。

#### ■ 『Voice』9月号 特別企画：「コロナ共存」への視座 ウイルスとの「均衡点」を探れ 山本太郎 長崎大学 熱帯医学研究所教授

山本氏は、短絡的にウイルス撲滅に躍起になれば彼らの毒性が高まり、かえって事態を悪化させかねず、「早期にウイルスを撲滅する」という考えから脱却し、「長期的なスパンを想定して共生する」との心構えを持ち、ウイルスとの均衡点を見つけていくべきと主張する。そして、ウイルスとどう付き合うのかについての国民の科学的なリテラシー向上がこれからの課題だという。

同氏は、「感染対策か経済活動の再開か」という二分論に立つべきではなく、経済を動かしながら、それと同時に感染拡大を防ぐために個別の課題を科学の活用で潰していく、という戦略こそ持つべきで、今後必要になるのは、店舗の休業要請ならば全国一律ではなく、地域や曜日などの個別の特徴を押さえたきめ細かな対応であり、その際にビッグデータやAI（人工知能）を活用すべきだと強調する。

また、「ウイルスとの共生を前提とすれば、感染自体が必ずしも社会にとって悪いわけではない」とし、感染データと向き合う際に、感染者数やPCR検査の件数以外にも、重症化率や感染経路不明数も重要な指標であり、「重症者を押さえることで死者数を減らし、感染経路を把握してクラスターを封じ込める。そうなれば、穏やかな感染の広がりはある程度許容できる」と主張する。

新型コロナウイルスが第何波まで及ぶのか、毒性がどこまで強まるのか、いつ終息が可能なのかは誰も断定できず、人類が長期的な忍耐を余儀なくされている今、新型コロナが終息しても新たなウイルスの出現に備えて「ウイルスと共生する心構えを持ち、しかるべき態勢を整えておくべき」として、日本版CDC(疾病対策センター)の設立が必要だと述べる。